

## ■研究調査レビュー

### 企画イベント「世界自然遺産と持続可能な発展」

山田 誠（鹿児島大学法文学部・全学プロジェクト「奄美の『島』コスモス創出事業」代表）

#### 1. はじめに

鹿児島大学は、本年度から奄美市と結んだ包括連携協定に基づいて、全学プロジェクト「奄美の『島』コスモス創出事業」を実施します。本プロジェクトの目的を奄美の方々に分かっていたくために、私たちは、11月に奄美市で養老孟司氏と小野寺浩氏の対談を企画しました。この企画で伝えたいのは、私たちと一緒に世界自然遺産にふさわしい島づくりに挑戦しませんかというメッセージです。

「世界自然遺産候補地に関する検討会」が国内3候補地の1つに奄美・沖縄を挙げてから3年が経過し、この間に、知床は自然遺産に登録されました。しかしながら、奄美にあっては、いくつかの点で遺産登録に対して戸惑いが存在するようです。主要な戸惑いは次の点にあるように思われます。

- ・奄美は、どこが世界自然遺産に値するほど貴重なのか。
- ・遺産登録が実現すると、奄美にはさまざまな規制がかかり、窮屈な暮らしになるのではないか。
- ・振興開発はストップして、これまで以上に経済面での衰退が進行するのではないか。

私たちは、研究や事業遂行により、これらの疑問に答えを出していくことを目指します。それとは別に、現時点で最善の回答を提供しようと今回のイベントを企画しました。この試みにより、どのような疑問氷解が期待できるかを以下で説明します。

#### 2. 鹿児島大学の奄美研究と「自立的発展」

奄美の中にある戸惑いの一つに、世界自然遺産登録は、奄美群島振興開発特別措置法(奄

振法)に依拠する開発をストップさせるという不安があります。この不安の背後には、貴重な自然の保全は地域の振興開発と真っ向からぶつかり合うという見方が前提とされています。私たちの見方からすれば、世界自然遺産登録の推進は、むしろ、今次の奄振法が採用した「自立的発展」と大きく重なっています。長年にわたり、「本土との格差是正」を目標に掲げて地域開発を進めてきた奄振法は、現在、地域の資源を活用した「自立的発展」に切り替えることを求めています。その際に、奄振法という地域の資源には自然のみならず文化的な資源をも含めることが大切です。とりわけ奄美の文化という無形資源の活用は奄美ブランドを築く際のキーポイントの1つだといえます。そして、世界自然遺産登録というテーマの登場を、奄美の豊かな島々に生き続ける貴重な動植物の保護と狭く限定しないで、自然環境に優しい生活スタイルの確立にまで広げると、それは、新しい社会環境の下で奄美社会の「自立的な発展」の道を切り開く契機だと言えるでしょう。

奄美にあっては昔も今も、生活場面にある自然を大切にし、敬ってきました。しかしながら、その場合には、生活に根づいた宝として扱ってきたわけですが、登録されたら人類共有の宝になるわけです。その時、自然を人間の生活から隔離してしまうのではなく、それぞれが共存できる環境条件を作り上げることが大切だと思います。実は、バイオエネルギーの利用、廃棄物処理の新技术などに見られる現代科学の成果を活かせば、便利さをあまり犠牲にしないで、しかも自然環境に優しい生活スタイルを築くことは可能です。

この目標に向けた鹿児島大学の具体的な取り組みが本プロジェクトの実施です。奄美においては、かつてシマ（集落）単位で生産・消費・祭事などを合体させた循環型の生活が営まれていました。今日にあっては、鹿児島大学の研究蓄積を踏まえれば、現代の科学技術の成果・新しい生活スタイルを組み合わせる島単位に循環型社会を築くことができるはずで、そこでは、新しい科学技術の導入と伝統的な生活習慣の再現を融合させる取り組みが大切だと考えています。これらの試み全体を一まとめにして、私たちは新しい『島』コスモスの創出と呼んでいます。これは、今次の奄振法に記された「自立的発展」の理念に、1つの具体的なあり様を描き込んだケースに相当するといえるでしょう。

鹿児島大学がこの3年間実施してきた全学プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン」は、生態系と調和した開発の方式による自立的発展の道を試行錯誤しながら開拓しようとした試みでした。その成果は別の機会に述べました（成果の詳しい報告は、『AMAMI News Letter』27号の記事「奄美の研究イノベーションと包括連携協定」を参照してください）。したがって、ここでは前回事業から導かれる反省点を取り出すのが適切でしょう。前回のプロジェクトは、いくつもの新機軸を実施したにもかかわらず、奄美の人々の大きな共感を引き出し、循環型社会への理解が進んだとは評価できません。私たちなりに検討し、期待した反応が得られない原因として次のような点を取り出しました。

- ・私たちの取り組みや研究成果を住民に直接訴えたり、提案する機会が少なすぎる。
- ・私たちの取り組みが住民自身の積極的な活動を誘発する性格になっていない。

この反省に基づき、今次の取り組みにおいては、次のような新機軸を打ち出しました。循環型社会づくりの具体的な実験事業を住民の見える場で試行する。また、当初から住民

の方々と共働する態勢づくりを目指す。11月のイベントは、新プロジェクトの計画と意図を奄美の方々に発表する場として位置づけています。

### 3. 発想の転換と2人の対談者

地元の戸惑いには、奄美は本当に世界レベルで見て特別に貴重な地域といえるのかという疑問があります。それに加えて、もし遺産登録されたとして、現在の暮らしをいろいろ規制されるのはありがた迷惑だという気分もありそうです。

まず、貴重な自然を擁する地域の意味ですが、これには2つの側面が含まれています。何はさておき、他地域には見られない動植物が生息していることです。でも、それは最低限の要件です。琉球列島、とりわけ奄美大島の特別さは、何万人もの人々が、その貴重な自然と触れ合いながら暮らしている点です。そんな例は他地域には無いのではないのでしょうか。職業面での自然依存こそこの間に大きく比重を下げているのですが、生活の中に自然のお付き合いが溶け込んでいます。一年の節目節目には、海・山・川と接触し、自然を深く敬う宗教が根強く信仰されています。生活文化においては、身の回りのさまざまな動植物が重要な役割を与えられています。

これらは、別な言葉で表現すると、生物多様性が大切にされていて、生態系と調和的な生活スタイルが現在も広く残っている地域に他なりません。奄美が維持している生活文化そのものが貴重なのです。このことが後者の気分に対する答えの手がかりを与えています。遺産登録されたからといって、一般の人々に外から特別な規制が強制的にかけられるわけではありません。逆に、奄美の独自性を強調し際立たせる方策を試行錯誤しながら進めていく活動が世界自然遺産にふさわしい島づくりといえます。

この島づくりは、経済社会を近代化させる

ことで「本土との格差」を是正してこようとした奄振法の路線からすれば、1つの大きな方向転換といえます。しかしながら、この島づくりは、成功すれば、大都市はもちろん、一定規模の人口集積がある地方にも見いだせない事例となります。その地域は国際的に先進モデルとなり、大勢の人々が生態系調和型の生活文化を理解するために訪問することでしょう。しかしながら、実際問題として、本土の大都市空間を目標に長年の間、振興開発を進めてきた地域の人々にとって、島づくりの発想の転換は、容易にできるわけではないと思われま

す。本プロジェクトは、奄美の方々が発想転換の重要性と、その具体的な取り組み方を次第に納得していけるように、中期的な事業展開を計画しています。そのスタートとなる11月のイベントでは、養老孟司氏と小野寺浩氏の対談を中心に据えています。お二人を簡単に紹介します。

世間では『バカの壁』で広く知られる養老氏ですが、実は若い頃に瀬戸内町の伝染病研究所(東京大学)で調査をされています。講演においては、人間が自然環境と切り離せない存在であると強調されます。そして、都会に住んでいると、人間が自然をコントロールしているかのような逆立ちした発想になる危険を、さまざまな例を挙げて説明してくれます。現代的な生活の便利さを追求する路線からの転換をインパクト強く訴えて下さり、聞く方々は自然と共生する生活の大切さを納得できるはず

です。小野寺氏は、1990年代初頭に鹿児島県で環境政策課長として、屋久島を日本初の世界自然遺産登録地にさせました。小野寺氏の特徴は、遺産登録を実現させるために、いくつもの仕掛けを編み出したことにとどまりません。遺産登録でもって、長期的に屋久島の地域発展を遂げさせるといった観点から仕事をしてきたことに、私たちは注目します。

もっとも、奄美をとりまく世界は屋久島と大きく異なります。たとえば、屋久島では、元々島に住む住民の間では循環型社会に向けた取り組みがあまり活発ではなかったといえます。しかしながら、保護地域と住民の居住区が空間的にはっきりと分離している屋久島の場合、それはそれで、あまり困らなかったといえます。奄美群島には12万人の住民が生活し、保護対象となる区域も生活空間と密着している部分が少なくありません。したがって、遺産登録が住民の生活スタイルに直接的な影響を与える度合いは、屋久島より著しく大きくなります。この間、屋久島を継続的に観察し、関与し続けてきた小野寺氏の日を通して、奄美が遺産登録を実現した場合に、いかなる地域発展の経路が可能なのか、その手がかりを聞き出せないだろうか、私たちは期待します。

誰であれ長年に培われた発想や観念を脱ぎ捨てるのは容易でないことからして、地域振興に関する発想の転換が一朝一夕に起きるとは思われません。それを確認したうえで、出発点にあたる今年度のイベントでもって、奄美の自然がもつ魅力に気づき、新しい地域発展観を育くむ契機を生み出したいと考えています。

#### 4. 奄美の『島』コスモス創出事業と実証プラント事業

奄美の伝統的な生活文化を大切にするのは悪くない。けれども、そのために以前の不便な生活に戻れといわれても、すでに身に付いた便利な生活を捨てられそうにない。こんな想いを抱いている人はけっこう多いように見えます。だからこそ、大型の開発案件が浮上するたびに、反対活動や訴訟が繰り返されるものの、自然を大切にする奄美で、反対活動への支持が圧倒的な世論には発展しないのだと思います。

この理由による新しい島づくりへの消極的な対応に関しても、目下、地殻変動的な変化が起きつつあります。その一つは、環境と調

和した社会づくりが国などの支援する振興開発策のリード役になってきたという事実です。もう一つは、政策を支える環境技術が目覚ましい進展ぶりをみせていることです。その研究を意欲的に推進し、成果をいち早く事業化できれば、日本中から注目を浴びるだけではありません。現在の便利な生活をあまり犠牲にせずに、循環型社会に近づけるようになりつつあります。循環型のエネルギー研究、その実証プラントの設置・運営は本プロジェクトの柱の一つです。そこには外部資金を獲得して奄美に配置する事業を組み込んでいます（図1を参照）。

本プロジェクトが計画する5つの事業は次のものです。

- ①世界自然遺産登録の活動支援
- ②奄美復帰の総合研究と先行奄美研究のデータベース化
- ③21世紀の循環型生活文化の再生
- ④研究者交流・人材育成
- ⑤奄美群島の発展計画の作成支援

これらをワンセットで実施に移し、一体として成果を上げられたならば、現代の技術・生活を基盤にして、あまり生態系を攪乱させない島社会を築けるに違いありません。この理念と目的を表現するために、私たちはプロ

ジェクト名を「奄美の『島』コスモス創出事業」と名付けました。

### 5. おわりに

本プロジェクトは、奄美の伝統を大切にしながら、生態系と調和した現代的な島づくりを目指します。その実現には発想の転換を伴います。したがって、大がかりな事業枠組みを描くことになりました。その一つの柱に、奄美群島の発展計画の作成支援が入っています。私たちは、奄美群島全体の人々と協力してプロジェクト事業を進めようとしています。その際、地域の代表役となって振興活動を直接に担っているのは、それぞれの市町村や県です。

国は、目下、それらの自治体が地域の「知の拠点」である大学と連携して地域再生計画を作成することが望ましいとする政策を打ち出しています。鹿児島大学は、平成18年3月に奄美市と「包括連携協定」を結び、その一環として地域再生事業でも連携しています。私たちは、奄美全域を代表する奄美群島広域事務組合や鹿児島県と、振興開発および教育研究促進に関する同様な協定が締結できることを望んでいます。

図1. 大学開発支援による奄美群島の再生事業に関する研究

